

ブロック 18

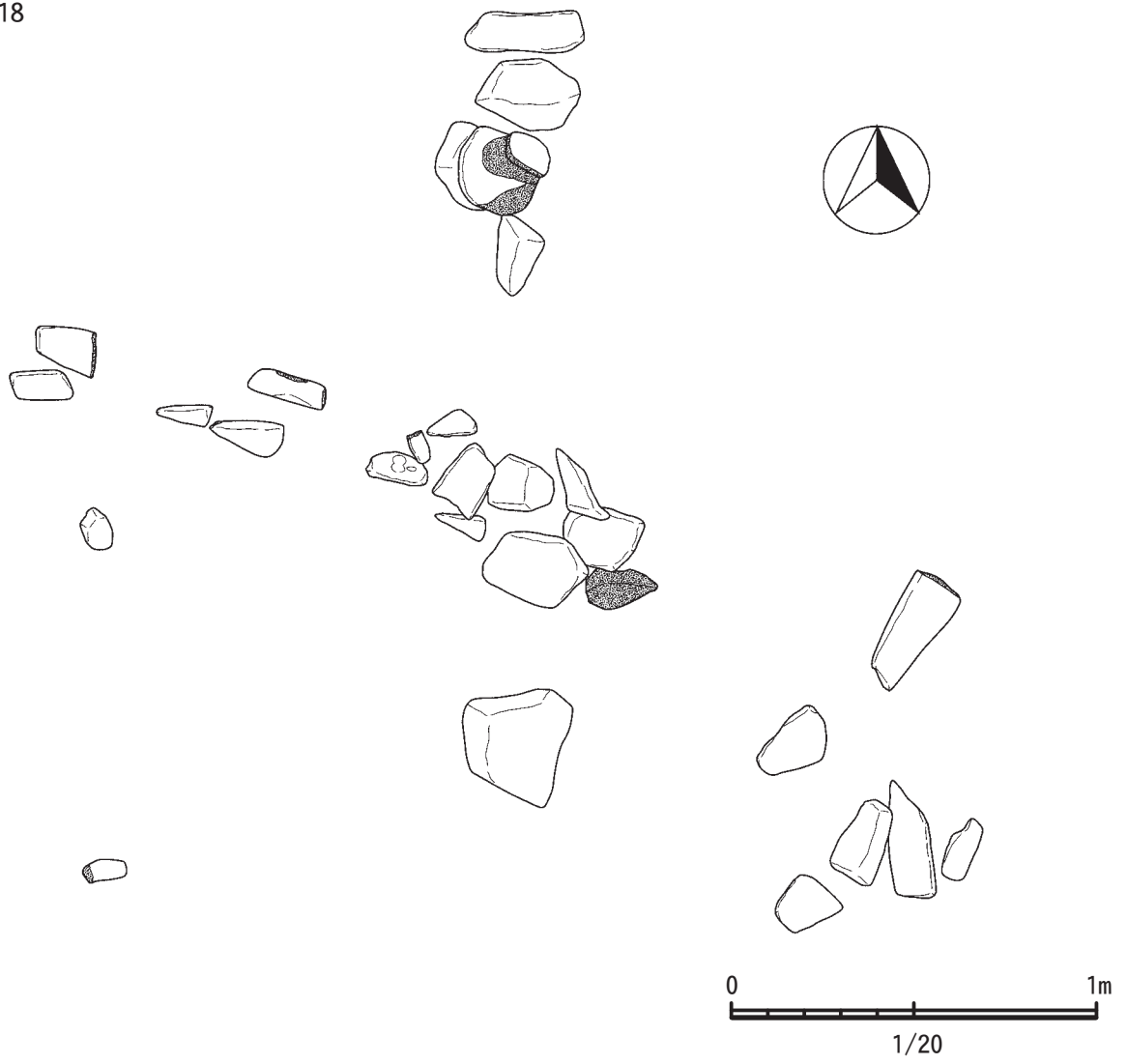


図64 環状列石Dブロック（9）

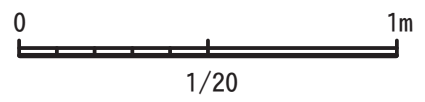


図65 環状列石Dブロック (10)

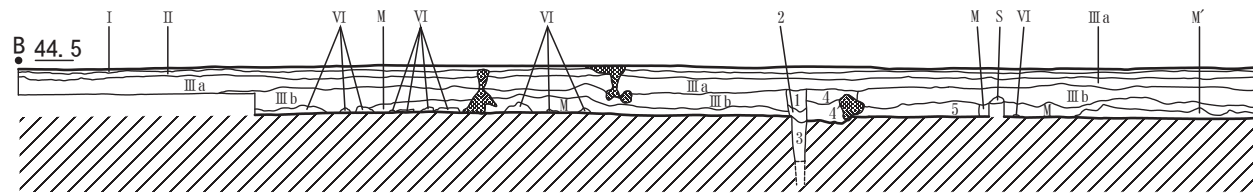
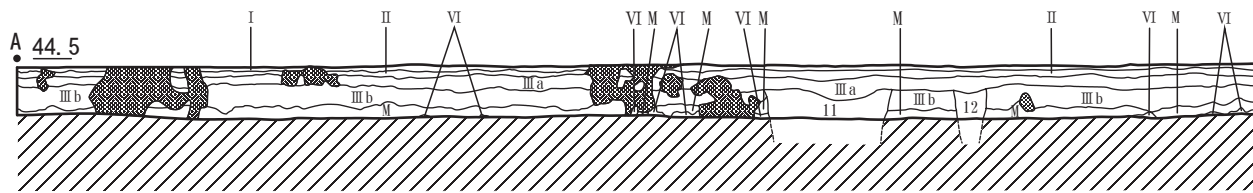


图66 环状列石



### (1) 掘立柱建物跡

環状列石D外周からは5基の掘立柱建物跡を検出した(図67・表5)。ほとんどは北東部分に集中している。また、北側にも建物跡を構成する柱穴が分布することから調査区外に建物跡が広がっている可能性が極めて高い。その一方で、10SB03と10SB04の間には柱穴は全く検出されず、建物跡の空白地が認められる。同様に、第14次調査範囲である北北西部分には柱穴が1基も認められないことから、建物跡の分布に大きな偏りが認められる。このような様相は環状列石Aに近い。

最小のものは「10SB02」で長軸長3.0m・長辺長3.6m・短辺長3.0m、最大のものは「10SB03」で、長軸長4.5m・長辺長3.5m・短辺長3.3mを測る。

10SB03に10SR01や9 SN01が伴うと仮定したら、10SB02は10SB03より古い可能性が考えられる。

9 SB03は建物のほぼ中心で、柱穴と同じ検出面で焼土遺構を確認した。この建物の柱穴の一つである10P18は人頭大の礫が挿入されていた。これは建物廃絶に関わる行為の一種と考えられる。

### (2) 埋設土器

環状列石Dの周囲から2基の埋設土器を検出した(図69)。

10SR01は環状列石の外周で、掘立柱建物跡が配置する地点で検出された(図70・71)。正位で埋設される。土器内部からは被熱した拳大の礫が1点、それよりやや小振りの礫が1点重なっていた。土器は深鉢で3段の文様帯で構成されている。1・2段目は磨消縄文で巴文が描かれていて、3段目は波状文が施文されている。

14SR571は環状列石の外帯上で検出された(図72・73)。無文土器を逆位で埋設し、その周囲に扁平な礫を横立石にして囲い込んだ埋設土器である。人為的に土器底面を円形に打ち欠いている。さらに埋設土器内部から拳大の礫が見つかった。つまり、底部穿孔土器を埋設し、穿孔部分に蓋をするように礫を載せていたと想定できる。

環状列石Cの5 SR03も同様であるが、被熱を受けた礫が土器内部から出土することがあり、土器埋設の1パターンと考えられる。

### (3) 焼土遺構

9 SN01は直径0.8mで黒色土層中で検出された焼土遺構である(図69)。深さ約0.2cmで下半部がよく焼けていた。掘立柱建物跡9 SB03にあたり、検出面は建物跡の柱穴と同じレベルであることから、関連すると考えられる。

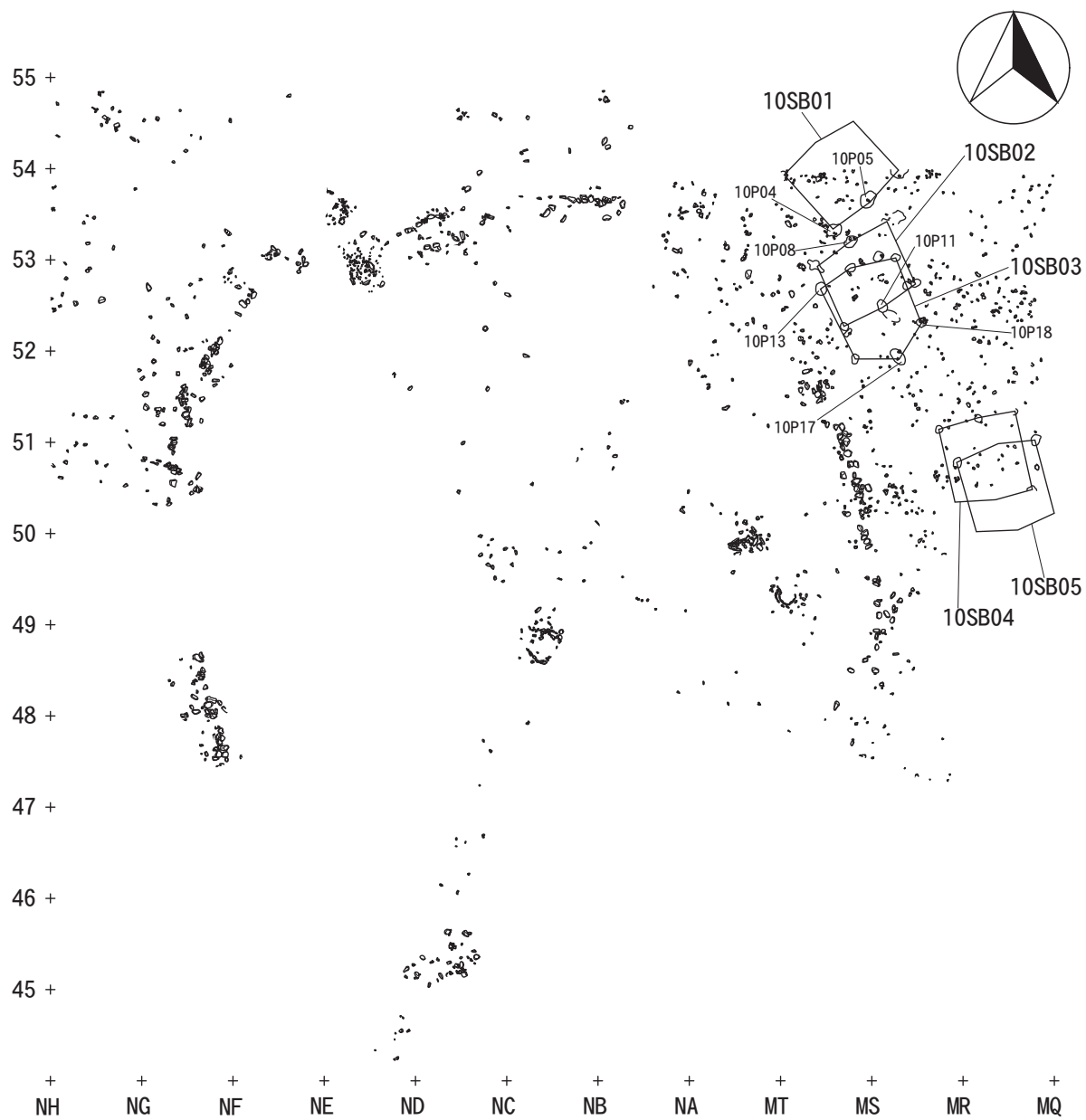


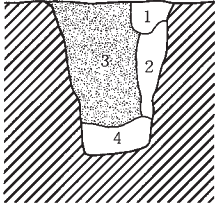
図67 環状列石Dにおける掘立柱建物跡分布図

| No. | 遺構番号   | 分類  | 棟方向 | 長軸長(m) | 長辺長(m) | 短辺長(m) | 重複 | 備考 |
|-----|--------|-----|-----|--------|--------|--------|----|----|
| 1   | 10SB01 | 1-2 | 南西  | -      | 3.9    | 3.4    |    |    |
| 2   | 10SB02 | 1-2 | 南西  | 3.0    | 3.6    | 3.0    | 有  |    |
| 3   | 10SB03 | 1-1 | 南西  | 4.4    | 3.5    | 3.3    | 有  |    |
| 4   | 10SB04 | 1-1 | 西   | -      | 3.4    | 3.4    |    |    |
| 5   | 10SB05 | 1-2 | 西   | -      | -      | 3.6    |    |    |

表5 環状列石Dにおける掘立柱建物跡

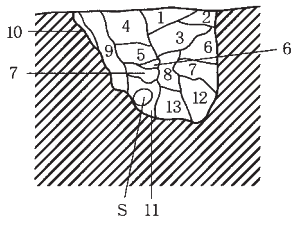
10P04

A43.9 — A'



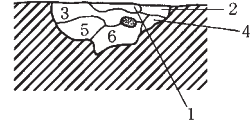
10P05

A43.9 — A'



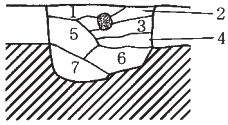
10P08

A43.9 — A'



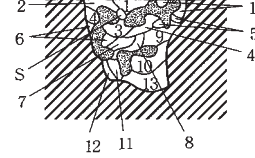
10P11

A43.9 — A'



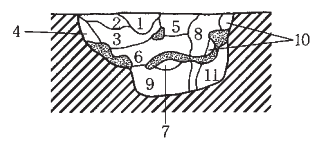
10P13

A43.9 — A'



10P17

A43.9 — A'



10P18

A43.9 — A'

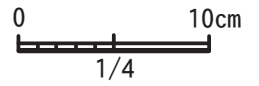


図68 掘立柱建物跡の柱穴

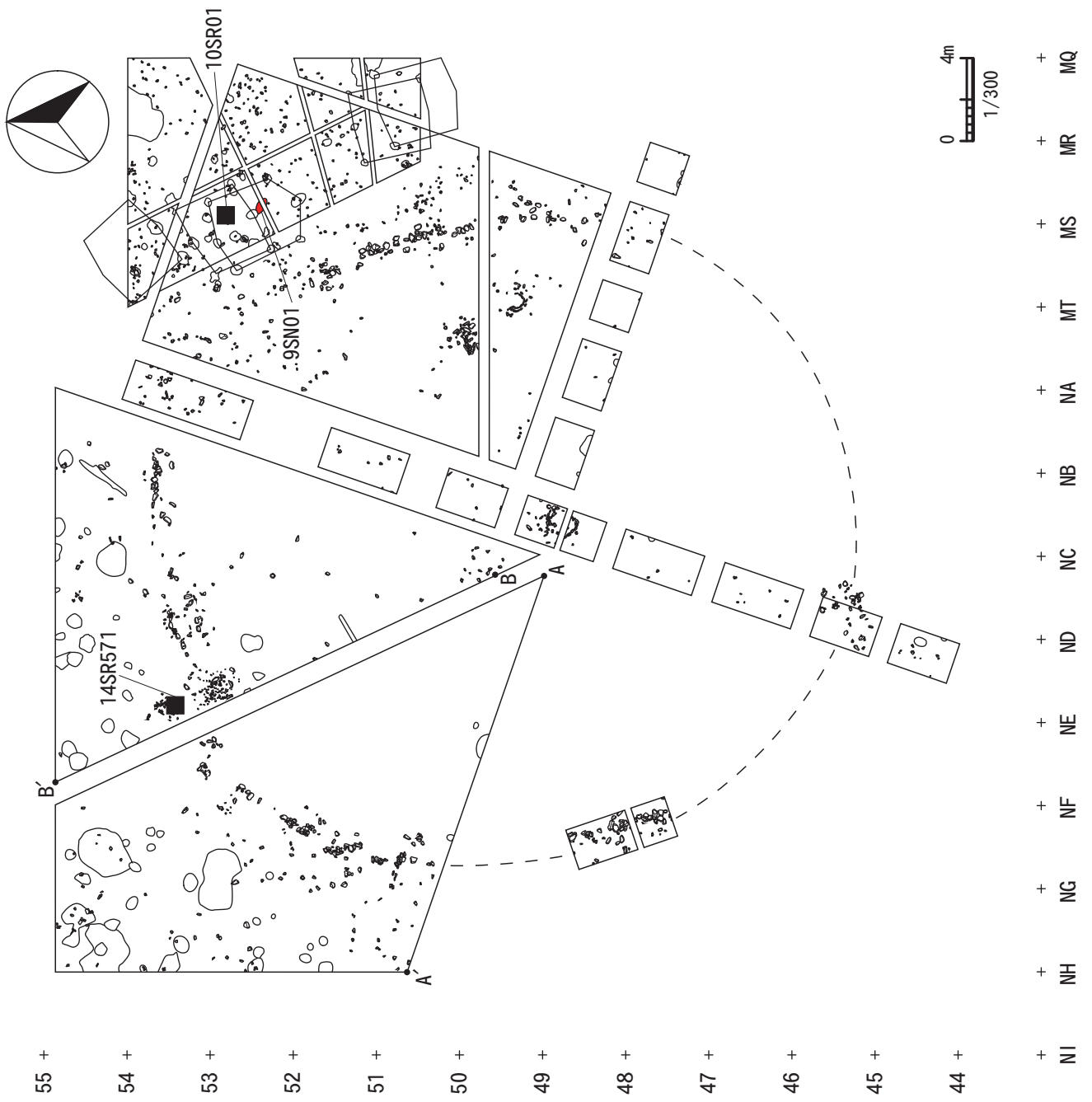


図69 環状列石Dにおける埋設土器・焼土遺構分布図



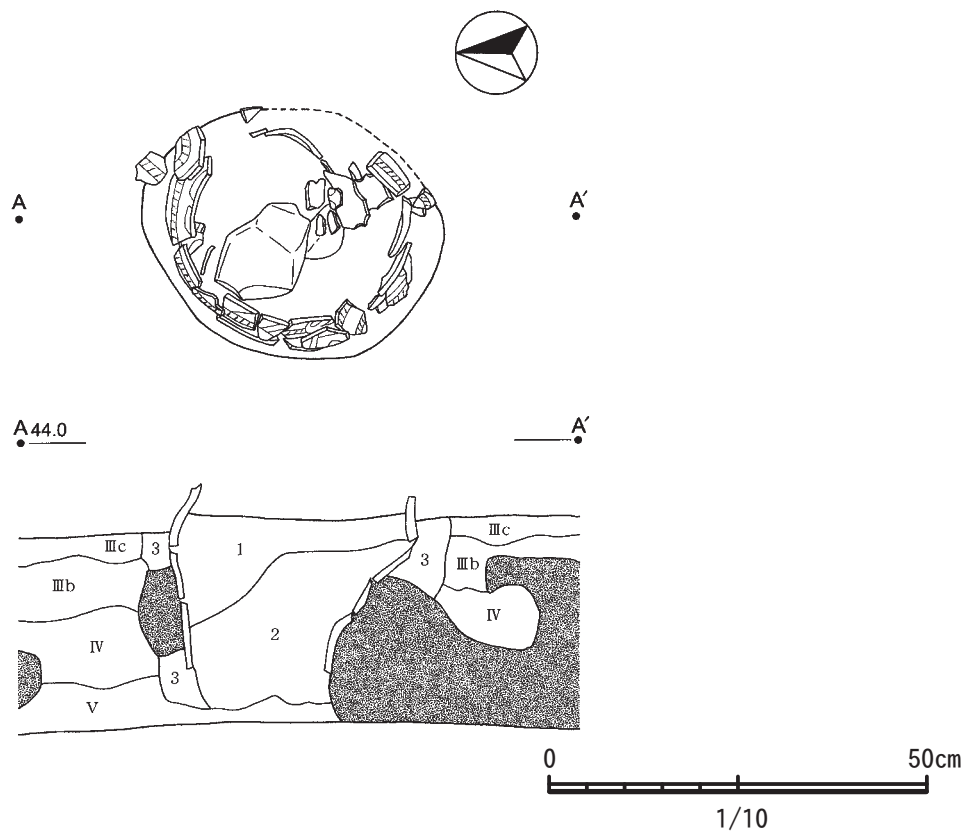


图70 10SR01 平面图·断面图

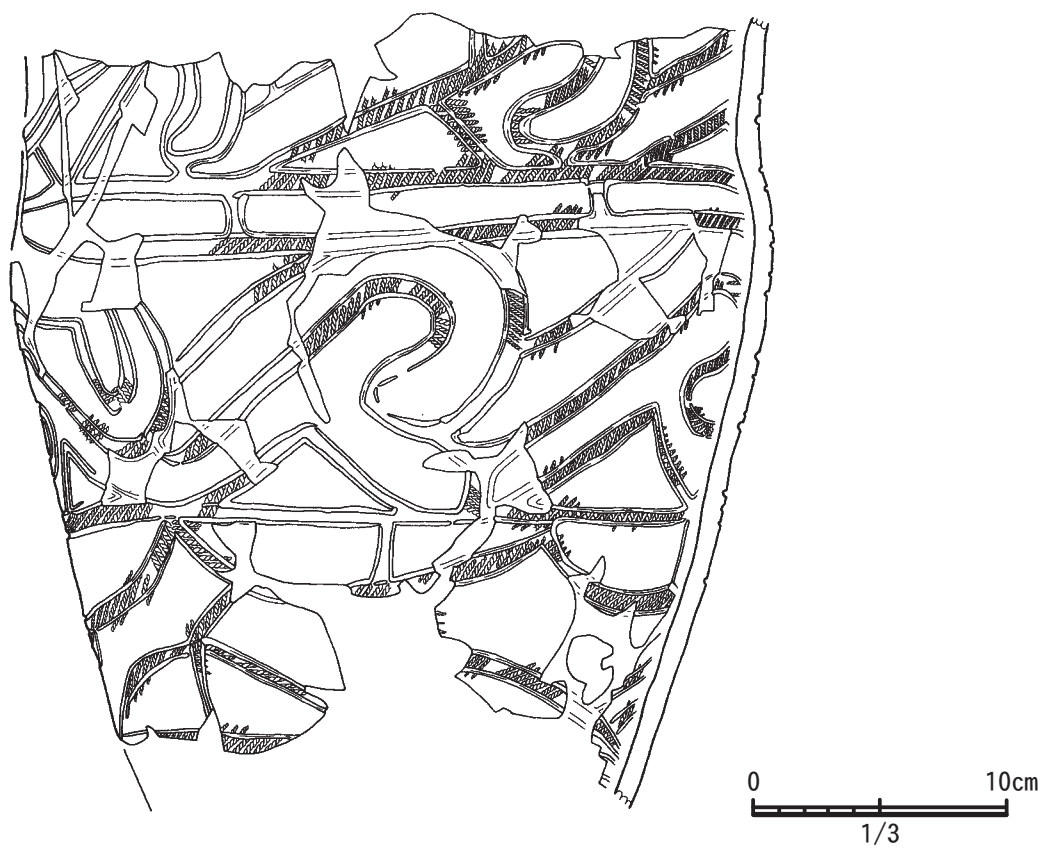


图71 10SR01 出土土器

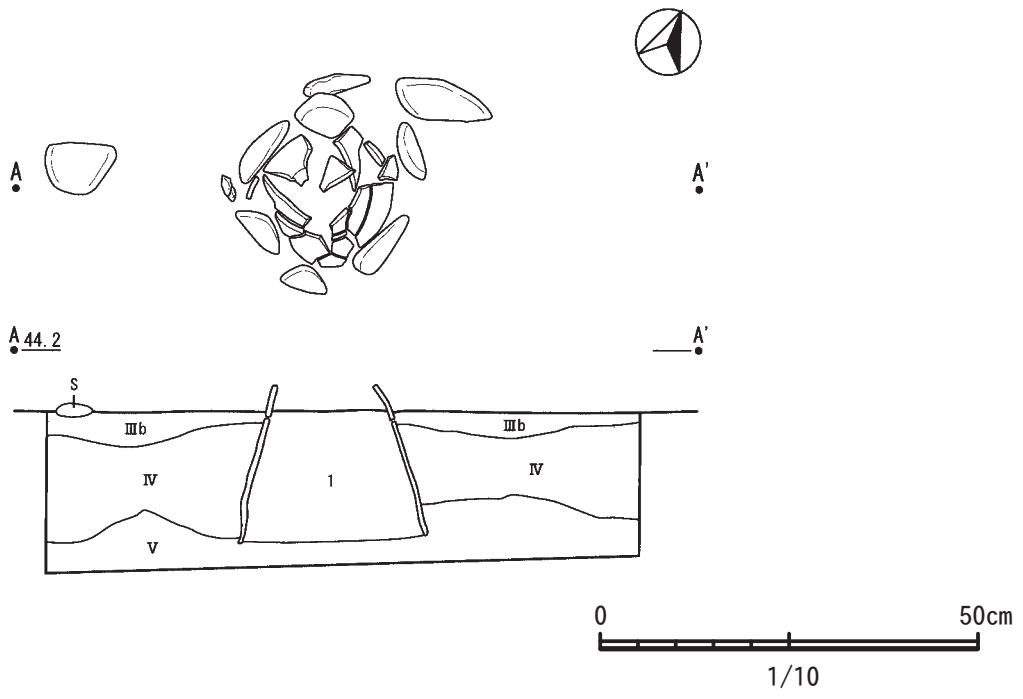


图72 14SR571 平面图·断面图

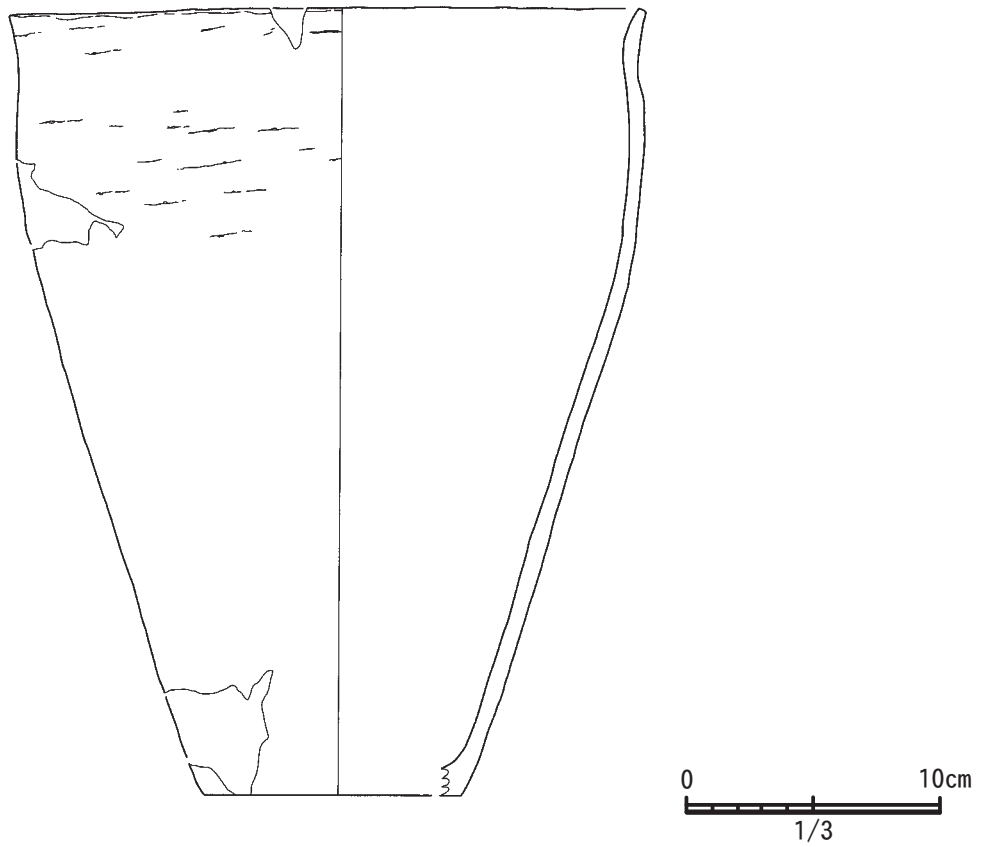


图73 14SR571 出土土器

## 5. 土坑

大湯環状列石では掘立柱建物跡群の外周にフラスコ状土坑群が存在する。伊勢堂岱も同様の同心円状構造と仮定しても、4つの環状列石は隣接しているため、どの環状列石に伴う土坑であるのか、範囲を括ることが難しい。そのためにエリア①-1に分布するものをまとめて報告をすることにした。

分類は第1章3節で述べたとおり、3つに分類可能である。

第1類は円形の土坑である(図74)。規模は直径1.5~2m程度で、深さは確認面から50~70cmと比較的浅い。埋土も黒色土にロームブロックが混入していて人為的な埋め戻しと考えられる。環状列石周辺に多く分布する。市教委の調査範囲では14SK572や14SK574が挙げられる。これらは小形のもので重複している。これらからの遺構内堆積土は黒色土と暗褐色土が交互に堆積するロームブロックも多量に含むことから人為的な埋め戻しと考えられる。土坑からはスクレイパー、石皿などの研磨器類、焼成粘土塊など出土することが多い。

第2類は小判形の土坑墓である(図74)。規模は1.5×1m程度で、確認面からの深さは50~70cmと1類と同じ規模である。環状列石AやB周辺に多く分布する。市教委の調査では、9SK04・9SK07が挙げられる。遺構内堆積土は地山ブロックを含む黒色土で構成され、スクレイパーや研磨器類など出土することが多い。

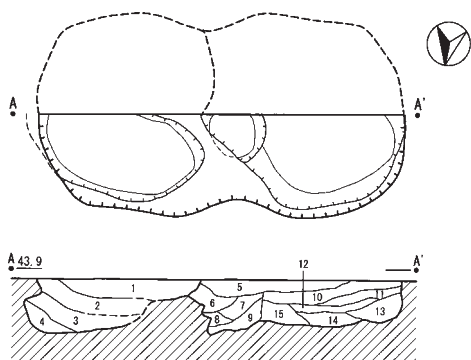
第3類は大型不整形土坑墓(秋田県教委1999)と命名されている(図76)。フラスコ状土坑を転用し、埋め戻しや袋状の掘り返しを行い、結果形状が大型の不整形プランになるものと定義されている(秋田県教委1999)土坑内堆積土上層で焼土面が形成されたり、祭祀遺物が多く出土することから、土坑が完全に埋没しない窪地の状態で「追善供養的な祭祀」が行われたと解釈されている。分布は図で示した(図75)ように、列石下部まで調査をしている環状列石A・Bの周辺に多い。環状列石はこれらの土坑の直上に造営される部分も見受けられる。

SK282から板状土偶(図77)が出土している。埋土中層で体部が、埋土上層で頭部が出土し、接合した。本遺跡で出土した土偶で唯一、完形に復元できた個体である。顔は刺突で目・口をつくる。口の周りに沈線を施していて、頬にも浅く短い沈線を加えていることが判明した(文化庁2010)。頭部に穿たれた孔は、頭髪の表現であろう。体部には沈線で格子目文を描いている。

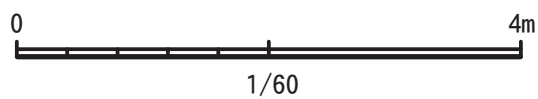
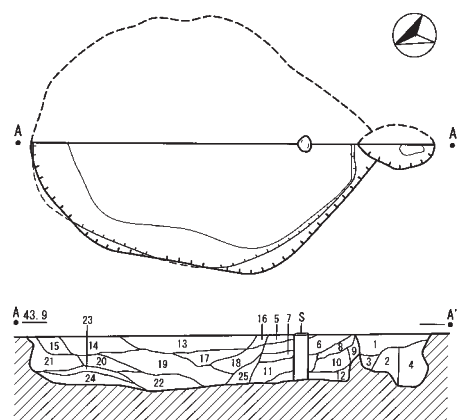
市教委で調査を実施した9SK08や11SK10においても、貯蔵穴の底面付近では凹石などの研磨器類が多く出土するが、土坑内堆積土上層で土偶などの祭祀遺物が出土しており、県教委の調査成果を追認することができた。

第1類

14SK574

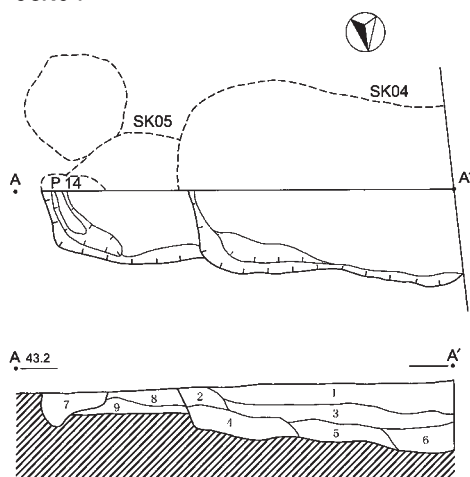


14SK572



第2類

9SK04



9SK07

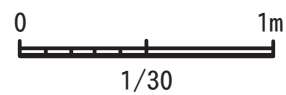
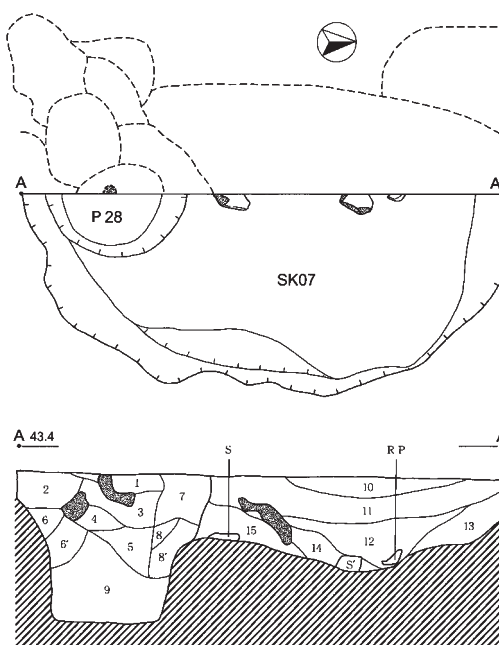


图74 土坑第1類・2類

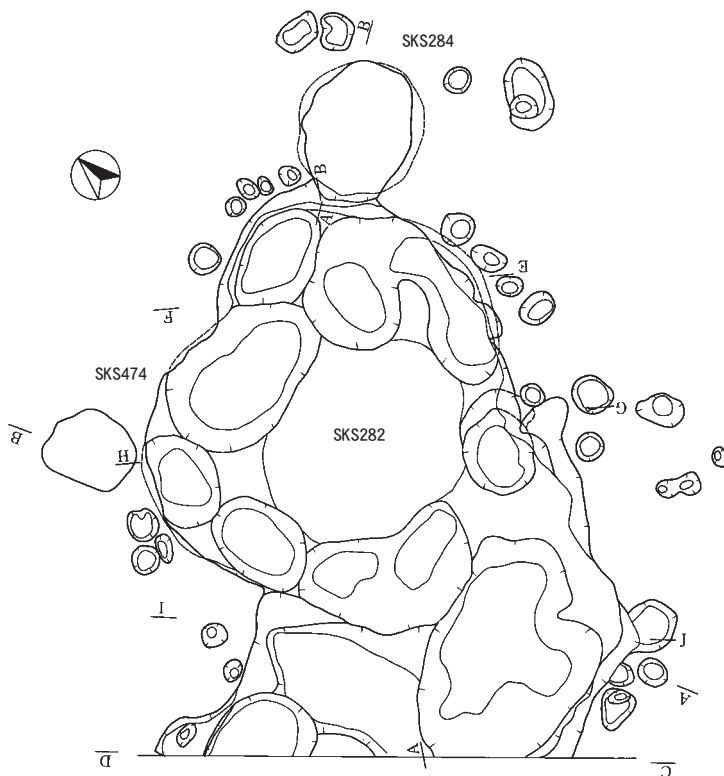


图75 土

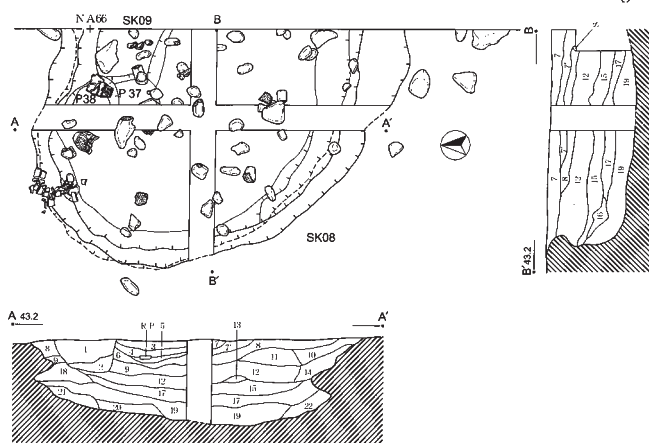


3類

SK282



9SK08



11SK10

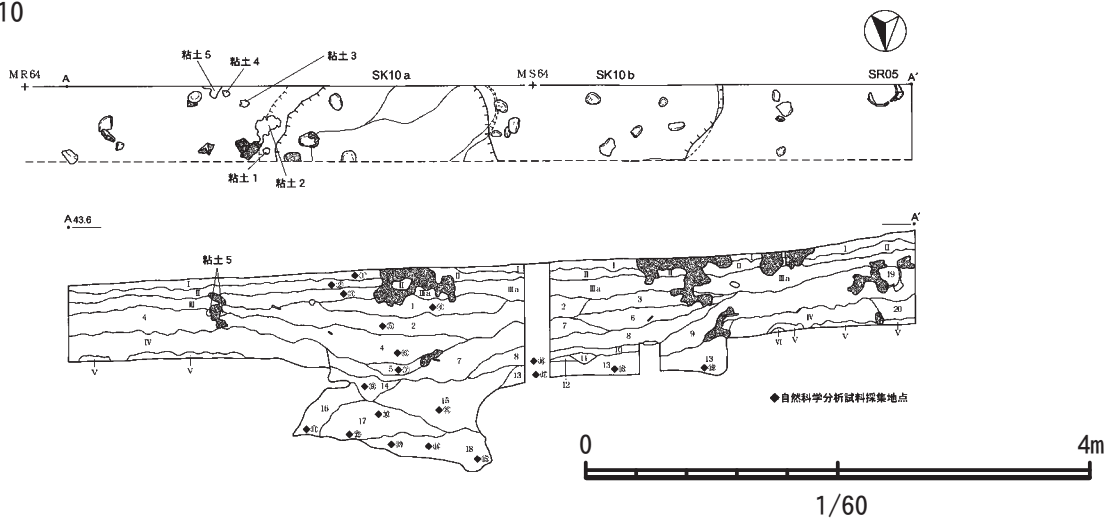


図76 土坑第3類